

加地伸行著 『中国論理学史研究 経学の基礎的探求』

著者	浅野 裕一
雑誌名	集刊東洋学
巻	51
ページ	123-133
発行年	1984-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132347

う。
しかし論理学が、自然界と人間界とを問わず、およそ人間が対象について思索する行為の基礎を成す以上、論理学への関心を欠いた中国哲学研究は、著しく均衡を失うと言わざるを得ない。著者加地伸行氏は、この難解極まる領域に真向から取り組まれ、既に数多くの論考を発表されてきている。本書は、これらの諸成果の結晶であり、中国論理学に関する専論としては、ほとんど我国初の本格的著作であろう。

 書 評

加地伸行著

『中國論理學史研究』
——經學の基礎的探求——

浅野裕一

本書は、大きく三部構成を取るが、以下その編次に沿った形で、内容を紹介しつつ、随時評者の私見を述べて行くこととしたい。

第一部 中国における論理学

第一章 中国古代論理學史研究の状況

この章で著者は、これまでの主要な研究を列挙し、内容を概説した後に、各々の欠陥を指摘する。先ず、本邦に於ける明治以降の論理學研究が、アリストテレス論理學、即ち伝統的形式論理學を基準に、墨家と荀子の論理學を、それに適合するものとして高く評価する反面、惠施・公孫龍等の論理學を、それに適合せぬ詭弁と貶しめてきたとする。著者はかかる風潮に対し、西欧論理學を唯一の判定基準に、中国論理學の是非を論ずる思考態度は、中国論理學の独自性を見落した所業であるとして、厳しい批判を加える。

また、宮崎市定・天野鎮雄両氏が近年行つた、『公孫龍子』の本文批判の試みに対しても、予め自己の思考の型を提出し、それに合致するか否かを基準に、テキストを改変するものとして、その方法論を強く批判する。その上で著者は、テキストに記された論理學と哲學者個人の思惟とを切り離さず、文献内容に歴史性を付与して、包括的に解釈

すべきであるとの立場を提示する。

続いて著者は、中国に於ける研究史を組上に乗せる。最初に胡適『先秦名学史』を取り挙げ、名の問題を中心に据えた初の体系的論理学史である、と評価する一方、なお伝統的形式論理学の枠内でしか名実を扱わぬ、その限界性をも指摘する。また郭湛波『先秦辯学史』について、唯物史観に立つ中国古代論理学史の先駆と位置づけると共に、荀子以降は論理学の発展が停止したとする、その結論を批判する。そして最後に、汪奠基『中国邏輯思想史』に対し、弁証法論理を形式論理學に優越させんとする、マルクス主義の硬直した図式に従うのみであり、かつ単なる資料紹介に終始して、何ら独創的研究方法を提起していないと、徹底した批判を浴びせている。

ここに展開される従前の諸研究への批判は、鋭くかつ的確であり、評者も深い賛意を表したい。著者は、かかる研究史批判を踏まえつつ、「漢語がどのような特性を有する言語であるか」ということの理解を前提にしないで、どうして中国論理学の研究が可能であろうか。従来の中国論理学史（古代あるいは他の時代を問わず）研究のほとんどに對する私の根本的批判はここにある」と述べ、漢語の特性なる言語学的視点より中国論理学を把握せんとする、著者独自

の研究態度及び方法論を予告する。

第二章 漢語の特性

本章に於て著者は、先ず宋代の詩論や日本の儒者による漢文法研究、清朝の文法理論等を通じて、漢語中に存在する、実字（名詞に代表される概念語）と虚字（助詞）との区分を明示せんとする。次いでこの区分から、漢語は実字中心、〈詞〉中心の言語であり、それに対して、日本語は虚字中心、〈辭〉中心の言語である、との漢日両言語の対比が導き出される。更に馬建忠『馬氏文通』の思考内容を好例に、中国人が、具体的事物と相即不離の対応関係を維持する漢字を、実字（概念語）として意識した点を確認し、「他の言語に比べて際立って概念語中心の言語であるところ」にこそ漢語の特性がある、との結論を提出する。即ち、主語・述語の文法的関係を必須の要件とせず、漢字自体が備える物象性・写象性に依存しつつ、概念語の排列を主体に意味を伝達する性格に、古代漢語の特性が求められた訳である。

これは、主語・述語の文法構造を中心とする、アリストテレス形式論理学を基準としてきた旧来の研究方法に對し、漢語の特性といった最深部の地点より、その根本的に不可能なることを論ずる思索であり、こうした視点・方法論は、

従前の中国論理学研究には全く見られぬ著者独自の創見として、高く評価さるべきものであらう。

もつとも、本来的に異質な言語間を比較し、或る言語の特性を抽出することは、想像以上に至難な作業である。著者は、前記の立論を古代漢語に限定し、現代漢語を考察対象より除外する方針を、予め断っている。とすれば、時期的限定を課された古代漢語を、他の言語、例えば日本語と比較する場合、比較される日本語は、如何なる時期的限定を課された上で、対象に選定されているかが問題となるが、この辺りの叙述は今一つ不明瞭である。

仮りに、古代漢語に対する古代日本語を想定し、比較を可能とする共通次元を固定せんとすれば、それは可能であろうか。古代日本人の思维、及びヤマト言葉の文字表記が、漢語の導入によって初めて可能となり、『古事記』『日本書紀』が各々変体漢文・純粹漢文で記録され、『万葉集』もまたその表記を、既に漢字に依存することを考えれば、比較以前に、そもそも古代日本語の確定自体が、およそ困難な仕事であることに思い至らざるを得ない。また漢文訓点資料も、既にそれが異国語たる漢文の、しかも漢文をほぼ保存した形での極めて特殊な翻訳体である以上、やはり純粋なヤマト言葉の記録とはなり難いであらう。

およそ言語は、常に多様な流動性を自らの内に含むが故に、比較の手續きをよほど慎重に踏んだ上でなければ、抽出されたものが、はたしてその言語に固有の通時的原理であるのか、または歴史的・地域的・階層的・用途的諸条件に規定された局部的現象(たとえその言語特有の変化原理を反映した現象であるとしても)であるのかは、容易に判別し難いこととならう。

中国語が、時代を追って助詞・虚字の類を著しく増加させてきていることは、周知の事実である。従って、実字中心なる古代漢語の特性が、どこまでの普遍性を持って中国人の思考様式を規定してきたのかは、なお即断し難い面を残す。この点は、古代漢語に時期を限定した場合でも、同様である。カールグレンが『左伝偽書考』に於て、春秋以前の文献に助詞の類が少く、それ以降助詞が増加する傾向を指摘し、その差異を文献の成立時代判定の基準とする、画期的方法論を提示してより、既に久しい。このように古代漢語と雖も、その内部は一樣ではなく、春秋以前と比較すれば、戦国以降は、明らかに助詞・虚字の類が増加している。

かかる現象を生じた原因としては、先ず『詩経』『書経』『左伝』『国語』等、概ね春秋以前の成立と目される諸文献

が、それぞれに背負う性格が挙げられよう。『詩経』は、無論採録された対象が詩であるとの特殊性を持ち、また『書経』は、『左史記言、右史記事、事爲春秋、言爲尚書』（『漢書』藝文志）と伝えられる如き、王者の公式發言の記録として、更に『左伝』や『國語』は、史官の集團による歴史記録として、各々特殊な成立過程を有する。詩はもとより韻文としてその文体を規制されるし、王者の公式發言は、当然莊重な美文体を要求するであらう。また史官には、代々伝承してきた史特有の文体が存在したであらう。こうした文獻上の性格は、いづれも、助詞類の使用を減少させる方向に作用したことが考えられる。

しかも、これらの文獻、及びその記録内容は、最初から特定の場面・状況なり、情感・意識なりを強く共有する、限定された人間關係内部で成立したものである。換言すれば、それらの諸条件を共有し難い、外部の人間一般は、対象として想定されない性格を持つ。従つてそこでは、助詞による細密な意味限定の必要度は、そもそも薄い訳である。

これに反し、春秋期の文獻であっても、比較的口語体を忠実に記録したと見られる『論語』に於ては、助詞類が相対的に多用される。大半は孔子と門人との對話であるから、

もとより場面を共有している訳で、一見助詞への依存度は低下するかの如くであるが、相手に伝達せんとする内容が、個人の微妙な心情を多く含むため、助詞による細かな意味限定を要請したと考えられる。

また戦国期の諸子關係の文獻になると、助詞を頻出させて、意味限定を明確にせんと努めた形跡が、一層瀝然としてくる。彼等は諸國を遊説し、或いは君主に自説を容れんとし、或いは論敵と激しい論争を繰り返す。もはや言語が発せられる対象との間に、情感や意識の共有性はほとんど期待できず、言語にはあらゆる障壁を乗り越えて、自己の意圖を相手に即座に諒解させる機能こそが、第一に求められる。助詞の多用による明確な意味限定は、かかる必然性の所産と思われる。

これと同様の事態は、為政者の側にも発生したと推測し得る。春秋から戦國へと、領域國家が膨張し続ける過程では、身分や言語・習俗、果ては民族さえ異にする諸階層を広汎に吸収し、自國內に包摂・編入して行かねばならない。それに伴い、布告や法律等の公文書には、あらゆる差異を貫通して、統治者の意圖を早急に伝達すべき機能が要求される。『商君書』が、「賢者にして而る後に之を知るは、以て法と爲す可からず。民尽くは賢ならざればなり。故に聖

人の法を為るや、必ず明白にして知り易く、愚知をして徧く之を知ら使む」(定分篇)と説く所以である。この場合も、助詞による明快な意味限定は、一つの有効な手段となろう。前述した中国語に於ける助詞の増加現象も、近來の句読点・疑問符・簡体字・拼音等の採用と共に、かかる社会的要請に応え続けんとしてきた結果と見做し得る。

以上の諸点は、評者が思いつくままに記した雑感に過ぎない。ただし、これらに留意しただけでも、習俗・方言等の地域差、意味を伝達し合う者同志が所属する階層的差異、言語が使用される状況・用途の差異、時代状況の推移による言語機能の変化等々、古代漢語も、その内部に多様な流動性を抱え込んでいた事情は、およそ推測し得るであらう。そこで話は元に戻るが、そもそも古代漢語の概念規定自体が頗る厄介であり、必然的に古代漢語の特性抽出もまた、それが原理であるのか現象であるのかを判別すべき、甚だ困難な作業に直面しなければならぬのである。

第三章 名と物と実と

本章では、漢語の特性と中国語論理学の特色との関係が述べられる。著者は、「はじめにことばがあった」(『新訳聖書』ヨハネ福音書・第一章)との訳文と対比しつつ、はじめに物が存在し、次にその写象として形成された漢語の特性を

指摘し、元來象形文字として出発した漢字は、形声字の増加後も、物に対する物象性・写象性より抜けきれなかったと説く。従って、中国人にとっては、対象である個物の実在は自明の理であって、ために中国では、個物の存在性を問う思惟は発生せず、個物なる対象を如何に精確に写し出すかが、専ら問題にされてきた、と著者の論旨は展開する。

またその場合、漢語は、修飾作用(分析表現)を被修飾語が吸収して、絶えず新たな概念語を創出して行く分類的写出の形態を取り、西欧近代語のような分析的写出へは進まなかったとされる。更に著者は、漢語の名詞は既に実在する存在事実の写しとして、或る概念を固定化する作用に最大の意味を持つのであり、印欧語文法流の主語・述語構造とは、本質的に相違すると言う。そこで、西欧人がことばの存在そのものを思考するのに反して、中国人は、対象の実在性をも、ことばの存在性をも疑わず、ましてや対象の背後に対して思索を向けることはなかった、と規定されるのである。

かくして、西欧哲学に於ては、S—P言語構造に由來する伝統的形式論理学・存在論が成立したのに対して、中国哲学では、概念語の連続なる漢語の特性から、名実論・概

念論・意味論を主とする中国論理学が形成された、との結論が導き出される。このように著者は、中国論理学の特質を名実論・意味論と理解した上で、『公孫龍子』を解釈せんとする立場を表明するのである。

これは、中途半端な文法論を跳び超えて、最も根本的な言語の段階より、中国人の思考様式、及びその反映たる中国論理学に迫らんとするもので、獨創性と本質的思索を重んずる著者の研究姿勢が、如実に現われている。ただ極めて大胆な問題提起だけに、細部に関しては、些か疑念もないではない。

先ず、著者が漢語の特性を照射するために引く、「はじめにことばがあった」との訳文であるが、本書第三部・第三章で著者自らが解説する如く、ロゴスの意味は西欧に於てすら今なお確定しておらず、神の思惟内容とか理性とか、種々の解釈が並立している。とすれば、前の訳文を引き合いに、西欧では「はじめにことばがあった」のに反して、中国では「はじめに物があった」と断定することには、若干の留保が必要であろう。古代中国に於ても、上天上帝の意志・理法が事物に先行するとの思考は、広汎に存在しており、もしヨハネ福音書第一章に対し、「はじめに神の意図・理法があった」との訳文を採用するときは、彼我の差

異はほとんど解消するからである。あまりに漢字の物象性・写象性を、漢語の特性、中国人の思考様式として強調することは、後に著者の中国論理学史で重大な役割を演ずる、中国的概念实在論の存在否定にも繋りかねず、却って本書の論理展開を妨げる危険がありはしないであろうか。

また、漢字の発生以前に、漢語が音声言語としてのみ存在していた段階を、当然想定しなければならず、その場合、音声言語としての漢語と、漢語の物象性・写象性、及び中国人の思考形態との連関は、どのようなであったのか、一言触れて欲しかった気がする。

それから著者は、古代漢語と西欧近代語・印欧語文法・アリストテレス論理学等を適宜比較するが、こうした直接的比較が、それぞれに如何なる共通次元設定によって可能となるのか、その手続きについても、明示して欲しかった所である。

次に本章の最大の論旨である、中国には個物の存在性や、ことばの存在性を問う思惟、及び対象の背後に向かう思惟等が存在しなかったとする点について、評者にはやはり疑問が残る。何故なら、個物は素朴实在論風には存在せぬのではないかとする、対象世界の存在性を問う思惟は、中国にもあり、その代表こそが公孫龍ではなかったか、と評者は

考えるからである。

対象・実と名とを対置する構図の下、はたして対象は我々の知覚のままに存在するのであろうか、との個物の存在性への懐疑・反省を生じたとき、その対象への、外向きの懐疑はまた、はたして我々には対象の実を完璧に捕捉し得るだけの認識能力が具備しているのであろうかとの、自己の認識装置への、内向きの懐疑をも同時に生ずる。即ち、存在論と結合した形で認識論・意味論の発生である。それは、外なる世界と内なる自己への本質的反省であり、公孫龍等が提起した名実論の本来の意味は、ここに存在したのではあるまいか。そして彼等が投じたこの深刻な懐疑こそ、世界と自己の實在性・安定性を破壊する行為として、彼等に容赦なき非難が浴びせられてきた原因ではなかったろうか。

また、意・情と言とを対置する構図の下、所詮言語は表現対象たる意・情を伝達せぬのではないか、との懐疑・反省を生じたとき、その言語に対する、外向きの懐疑はまた、言語を以ては如何にしても表現し切れぬ、自己の魂への、人間存在自体への、内向きの懐疑をも同時に生ずる。「書不盡言、言不盡意」(『易』繫辭伝)「知者不言、言者不知」(『老子』第五十六章)「言者有言、其所言者特未定也、果有言邪、

其未嘗有言邪」(『莊子』齊物論篇)等は、まさしくそうしたことばの存在性を問う思索ではなかったか。そしてそれが、言語の恣意性・限界性を超えんとする神秘主義を生み出す、一つの中国的契機ではなかったろうか。

更に、万物の背後に宇宙の本体・根源たる道を措定する『老子』、個物を超えた世界の在り方を道・天として措定する莊周、個物の背後に上帝の意志を想定し、天命・天性で両者を繋ぐ各種性命思想、個物の背後に普遍者を想定する公孫龍、至大・至小概念を實體化し、その間に万物を分類・収容せんとした惠施、王朝交替現象の背後に五徳転移の理法を観る鄒衍、天道の背後に上帝の意志を読み取らんとする黄帝書等々、中国にも対象の背後に向けられた思惟は豊饒に存在し、むしろそれこそが、思想界の本流だったとは考えられぬであらうか。確かに著者の指摘する如く、中国人の思惟形態が抜き難い即物性にあったとしても、そもそも思想とは、世俗の常識なる大地より離陸・飛翔せんとする性格を持つため、漢語の特性や中国人の一般的思考様式も、突出した思想内容個々を、必ずしもそのまま規定せぬのではあるまいか。

以上が、評者の脳裏を掠めた、素朴な疑問である。

第二部 『公孫龍子』解釈

第一章 文獻問題

本章では、道藏本『公孫龍子』を最善のテキストとしてきた通説を再検討し、改めて道藏本を底本とすべきであるとの結論に至る。私見によれば、堅白論・白馬論など篇によつては、著者が比較の対象に挙げていない、崇徳書院二十家子書本の方が勝ると思われる。もつとも、著者が指摘する通り、版本の優劣は、結局は解釈者の本文理解に帰着するのではあるが。

第二章 名実論と第六章 通變論

これら五章には、公孫龍を唯名論者と規定する立場に立つた、著者独自の鋭敏な『公孫龍子』解釈が開示される。評者は『公孫龍子』解釈に関し、かねがね著者とはかなり異なる立場を取ってきているが、ここで解釈の是非を云々することは省かせて頂く。個々の解釈を廻る論議は、自ら『公孫龍子』と格闘した人でなければ、到底理解が困難であり、ここで自説を述べても、徒らに「弁者相い与に之を楽しむ」(『莊子』天下篇)印象を与え、訳の判らぬ詭弁を弄する者との、識者の憎悪を招くだけであろうから。

第三部 『公孫龍子』の哲学史的位置

第一章 名実論争における公孫龍

著者は、古代の中国論理学を、名よりも実を優先させる唯名論の系統と、実よりも名を優先させる概念实在論の系統とに大別し、楊朱・墨翟・公孫龍を前者に、孟子・荀子・法家・董仲舒を後者に分類する。その上で、戦国期は圧倒的に唯名論が優勢であつたが、秦漢帝国の成立と共に、法源としての皇帝概念を絶対化・普遍化する必要から、唯名論を否定せんとする実念論が登場してきた、との思想史的推移が述べられる。

著者は、実念論の興隆に果たした荀子の役割を特に重視し、皇帝概念は、荀子の立てた大共名―大別名(散名)なる分類概念中の、大共名に比擬されて、普遍者として実体化されたと言き、更にこの実念論の淵源を、古代の呪術的思考に求めている。周末戦国期には、個物の実感が優先して唯名論が勢力を得たのに対し、統一帝国の出現と軌を一にして、再び呪術的思考・実念論が思想界を支配した、と言うのである。そして最後に、こうした哲学史を踏まえつつ、クラス分けを主体とする荀子の外延の論理学が、個物の分類・収容を特色とする漢代文化の体系化を可能にし、そのための論理学的基礎を提供したとの、長期的展望が示されている。

このように、単に思想の上澄みを掬っただけの思想史ではなく、戦国から秦漢に亘る歴史的推移と、論理学の変遷とを緊密に関連づけた考察は、従前ほとんど見られなかった斬新な研究であり、思想内容に歴史性を付与せんとした著者の試みは、大きな成果を挙げたと言える。

もっとも評者には、幾つかの疑問点も感じられた。それは、名と実のいずれを優先させるかとの分類基準が、今一つ曖昧さを残す点である。もしこれが、名実いずれの存在が先行するかとの時期的先後関係を指すのであれば、「名とは実の賓なり」（『莊子』逍遙遊篇）との思考は、学派を超えた共通認識であって、管見の及ぶ限り、名が実に先行するとの主張は、古代中国論理学には存在しない。

およそ言語（名）は、先ず対象の実に命名が行われて、名実の固定的対応関係が万人に共有され、次いで名の共通性を利して、万人が或る名からそれに対応させられている実を共通に想起し得る、との時期的先後関係を追って成立する。しかも、この前後二段階構造は、同時に言語の普遍的機能として、成立後も保存・維持される。従って、形名参同術の如く、確かに名を基準に実を正さんとする思考が存在するとしても、それは、前半の対応関係確立を大前提に、後半の機能に注目した理論であって、時期的先後に関

し、名を実に優先させるものではない。優先関係としては、別に価値的序列が存在するが、これも上述した言語の本来の成立過程・普遍的機能に由来して、常に実の側が優先される。有名無実・名存実亡は、何人によっても肯定はされないのである。

また、普遍概念を実体化するかどうか、名実の優先関係を直接に規定はしない。填充性や色彩を、個物の属性としてではなく、堅さそのもの・白さそのものとして普遍化し実体化する場合、それら普遍は、最初から既に実と意識されているからである。従って、普遍概念を実体化するか否かで、唯名論・実念論を区分する行為は、もとより可能であるが、名実いずれを優先させるかとの基準では、両者の区分は不可能ではなからうか。

更に唯名論と実念論の消長を、呪術的古代—周末戦国期—秦漢帝国、との時代状況の変化で説明することは、唯名論が、漢語の特性やその投影たる中国人の一般的思维形態に基づくとしてきた論旨と、抵触する恐れはないであろうか。

最後に皇帝概念の性格についても、「今名号更めざれば、以て成功に称い、後世に伝うること無し。其れ帝号を議せ」「秦王兼ねて天下を有ち、名を立てて皇帝と為る」「朕は尊

きこと万乗なるも、其の実母し。吾れは千乗の駕・万乗の属を造り、吾が号名を充たさんと欲す」「秦は故王国なり。始皇は天下に君たり。故に帝と称す。今六国復た自立し、秦の地は益ます小なり。乃ち空名を以て帝爲るは、不可なり。宜しく王爲ること故の如きは、便なり」(『史記』秦始皇本紀)「諸侯上疏して曰く、(中略)昧死再拜し皇帝の尊号を上らんと。漢王曰く、寡人聞く、帝とは賢者の有なりと。虚言亡実の名は、取る所に非ざるなり」(『漢書』高帝紀)等といった、制定・継承・廃止・復活の経緯から、はたしてそれが、呪術的実念論の所産であつたか否か、なお再考の余地があるやに思われる。

第二章 公孫龍後学

著者は、公孫龍とその集団は、論争して敗れたことなき無敵の論理学派であつたとする。ところが、後学が白馬非馬論を学説の中心に据え、しかも認識論的問題であつた論理を、存在論の問題であつたかの如く誤解させる解説を施したため、それが契機となつて、荀子・韓非等の実念論者から徹底的批判を浴びたと、公孫龍学派衰退の原因が説かれる。

しかしながら、『史記』集解が引く劉向『別録』には、趙の平原君の面前で、公孫龍及びその徒属と、斉より訪れた

鄒衍とが、白馬非馬論の是非を激しく論争した末、公孫龍学派は鄒衍に敗北して平原君に斥けられた、との記録が見える。とすれば、公孫龍学派衰退の原因を、後学の言わば失策にのみ求めるのは、必ずしも妥当ではなからう。

評者の私見によれば、公孫龍は、堅や白など通常個物の属性と考えられていたものを、認識不可能な普遍として実体化している。当然それは、素朴実在論者の眼に、個物を各種普遍者によつて解体する行爲と映らざるを得ない。しかも公孫龍は、個物内に絶対他者としての普遍を宿らせながらも、プラトンに於けるファイドロスとしてのアイデアや、スコラ哲学に於ける神の意志、「天の命ずる之を性と謂う」とする『中庸』の天命、朱子学の天理等の如く、各種普遍を究極的に統括する絶対的普遍者を、天上の神なる既成の權威に寄りかかった、受容され易い形で設定しようとはしなかった。故にそこでは、眼前の世界同様、背面世界もまた、統一性を喪つたままに終る。ここに公孫龍学派が、個物の充足性・世界の安定性を、人間の認識能力や言語の共通性もろとも破壊する者として、激しく非難され敗退して行く根本的原因があつたように、評者には思われる。

第三章 名学の哲学史の意味

この章では、経学の本質を名物学と捉え、漢語の特性、

中国人の思考様式、公孫龍に代表される唯名論的論理学等を、漢代以降の経学史と同一線上に並べ、包括的に理解せんとする、壮大な今後の研究構想が予告される。本書が「經學の基礎的探究」との副題を持つ理由も、ここに鮮明となろう。こうした視点からの経学研究は、著者の独創によつて切り拓かれた、全く前人未踏の領域であり、その豊かな結実を期待したい。

以上、加地氏の大著について、拙い批評を試みてきた。本書には、到る所に著者の創見が充ち溢れている。評者の抱いた疑問も、尖鋭にして独創的な著者の学説に触発されて、導き出されてきたのであって、それだけ本書には、重大な問題提起が数多く込められていると言ふべきである。今後、本書が言語学的視点より提起した諸問題に対し、論究が重ねられて行くならば、必ずやそこには、幾多の貴重な学問的成果が生み出されよう。その時、新たな体系的学説を提示したと言うに止まらず、優に新たな研究上の一分野を創出したと称するに足る本書の真価が、改めて確認されることであろう。

著者は、孤剣を抱いて壮途に着かれた。鋭鋒の光芒、いよいよ輝きを増さんことを念じつつ、筆を擱きたい。